



「命の重さはみな同じはずです。新型の出生前診断は命の選別につながる危険が大きいと感じ反対です！」

岩元 綾 (39歳・鹿児島県)

5月号から、ダウン症のある人たちに自分の言葉で主張していただく新コーナーを設けました。まずは、3月20日のイベントで堂々とメッセージを伝えてくれた4名の方に、順に登場してもらいました。

世界ダウン症の日おめでとうございます。

皆様、こんにちは。鹿児島から来ました岩元綾です。ダウン症があります。

国連が定めた世界ダウン症の日をこの会場で皆様とご一緒に迎えられることをとても嬉しく思います。

私は1998年に大学を卒業してからずっと出生前診断に対して反対し、ダウン症に対する理解を求めて全国各地で講演・交流活動を続けています。

今度の新型の検査にはとても危険を感じています。生まれる前に検査をして命を選別することは、今生きているダウン症の人たちを否定することになると思います。

命の重さはみんな同じはずです。なぜダウン症だけなのかとずっと思ってきました。障害の中には生まれてこなければわからない障害もあります。そんななかでダウン症だけを生まれないようにするというのは怒りというよりも悲しみのほうが強いです。

生まれてこないほうがいい命なんてありません。赤ちゃんはお母さんのお腹を蹴ったり、叩いたりしながら命があることを知らせてくれます。出生前診断で命の芽を摘むよりもダウン症、障害のある人、すべての人が生きやすい社会をつくるほうが先ではないでしょうか。

ダウン症や障害があるとかわいそうだと感じる人もいるかもしれませんが、それは違うと思います。幸せのかたちは人それぞれです。多くの人がそれぞれの幸せを味わえる社会を作ることが大事だと思います。

私は、生きているすばらしさを日々実感しています。ダウン症があったからこそできた経験や多くの出会いもあります。両親には心から生きていてよかった、産んでくれてありがとうございますと言いたいです。

終わりに、昨年出版した詩集『ことばが生まれるとき』（かもがわ出版）から私が心を込めて作った「いのちの重さ」の詩の一部を朗読します。<注：以下、省略しますが、ぜひこの綾さんの本をお手に取ってみてください！>



プロフィール

県立牧園高校普通科を経て、鹿児島女子大学（注：1999年に志学館大学に名称変更）英語英文学科を卒業。第3回アジア太平洋ダウン症会議で、ダウン症本人として初めて英語でスピーチ。その後、世界ダウン症会議に2度参加したり、国内での講演・交流活動などを続けている。『21番目のやさしさに』『ことばが生まれるとき』（ともにかもがわ出版）などの著書がある。趣味は音楽鑑賞と辞書引き、美術館巡り。